

八月十五日と私

五木寛之

井出孫六

伊藤ルイ

永六輔

江口渙

大岡昇平

大庭みな子

木下順二

高史明

小松左京

澤村貞子

柴田錬三郎

瀬戸内寂聴

高峰秀子

竹内好

田辺聖子

つださうきち

坪田譲治

寺山修司

戸板康二

なだいなだ

夏堀正元

野田宇太郎

真船豊

水上勉

宮澤俊義

村山知義

森崎和江

森繁久弥

吉本隆明

ロゲンドルフ



角川文庫

はちがつじゅうごにち わたし
八月十五日と私

いつきひろゆき いでまごろく いとう
五木寛之・井出孫六・伊藤レイほか



角川文庫 9678

平成七年五月二十五日 初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)三八一七―八四一〇
営業部(〇三)三八一七―八五二一

〒二〇二 振替〇〇一三〇九―一九五二〇八

印刷所——厚徳社 製本所——千曲堂

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

八月十五日と私

五木寛之・井出孫六・伊藤ルイほか＝著



角川文庫 9678

八月十五日と私
目次

私が哀号と眩 アイゴウツぶや くとき		五木寛之		七
一九四五年、ぼくは中学生だった		井出孫六		一六
八月十五日に想う 1986.8		伊藤ルイ		三七
八月十五日の僕		永 六輔		四
終戦と子供の死		江口 渙		三
俘虜記		大岡昇平		四
プロメテウスの犯罪		大庭みな子		四
歩みだし		木下順二		四
とつぜんやって来た敗戦の日		高 史 明		六
昭和二十年八月十五日		小松左京		六
一生懸命生きてみたい		澤村貞子		六
兵隊であって兵隊ではなかった		柴田錬三郎		二三
北京、しのつくような雨が視界をさえぎっていた		瀬戸内寂聴		二八

戦争は終わったのに	高 峰 秀 子	二三
屈辱の事件	竹 内 好	二三
日本降伏	田 辺 聖 子	一四
八月十五日のおもいで	つ だ さ う き ち	一六
終戦の日	坪 田 譲 治	一七
誰か故郷を想はざる	寺 山 修 司	一八
終戦の日の前後	戸 板 康 二	一八
ほらほんとに終わったじゃないか	な だ い な だ	二二
非国民二等兵	夏 堀 正 元	二三
終戦前後	野 田 宇 太 郎	三〇
北京風景	真 船 豊	三九
リヤカーを曳いて	水 上 勉	四六
そのころの生活	宮 澤 俊 義	三三

私が哀号アイゴウと呌つぶやくとき

五木寛之

戦争が終わったとき、私は中学の一年生だった。私はいずれ爆薬を抱いた軍用機で、本土に攻めよせる敵艦に体当たりして死ぬだろうと、勝手に自分の将来を決めていた。

反戦えんせんも厭戦えんせんもなにもない。それ以外に自分の未来などというものが、全く想像できなかったのである。それは恐らく私がもう二、三年上の年齢だったら少しは違っていたのかも知れぬ。だが、当時の私は、まぎれもなく戦争のなかで育ち、戦場で死ぬことを頭からなんの疑いもなく信じ込んでいた中学生の一人だった。いまにして思えば、いろいろ理屈は出てくる。しかし、人間の心理状態を決めるのは、ひとつの状況であって、論理ではない。私はどんなに戦局の不利が伝えられようと、日本が敗まけるなどということは夢にも考えたことがなかった。

それは私の父もそうだったように思う。ひょっとしたらすでに敗戦を予感していながら、

私たちに知らんぷりをしていたのではなからうか、と後で考えてみた。だが、やはりどう判断しても私の父は戦争が最後まで日本の勝利に終わると信じこんでいたとしか考えようがない。それは当時の日本人の思いあがりだったかも知れないし、また愚かさだったのかも知れない。だが、事実は事実である。

戦争が敗けたとわかった時、びっくりした。ほっとしたのではなく、がっかりしたのでもない。正直言って、ただびっくりしたのである。そしてその日から、周囲の様子がたちまち一変した。

私たち一家は、敗戦の時、朝鮮の平壤に住んでいた。当時の平壤府である。外地での敗戦体験については、すでにいろんな人が語っている。私もそれについて何度も書いた。それは、要するに昨日までの黒が一挙に白にひっくり返ることであり、強者が弱者に、支配者が囚人に、そしてこれまで悪とされていたことが英雄的行為とみなされる劇的なドンデン返し of the 体験だったと言える。私たちはそれまで、日本語の世界に住んでいた。すべての朝鮮人は陛下の赤子であり、日本人であるとされていた。したがって日本語をしゃべることが強制され、朝鮮人はその姓名まで日本風のものに改めなければならなかった。

私は一度、朝鮮人の学生が教師だった私の父親に、殴られるのを見たことがある。彼は殴られた瞬間、思わず、哀号！ と反射的に小さく叫び、そのことでまた前よりもいっそ

う激しく殴られたのだった。

「朝鮮語を使うな。アイゴ―とはなんだ」

と、私の父は目を細めるようにして意外に静かな口調で言い、その冷静さがかえって見ている私に強い印象をあたえた。

「足をひらけ。歯を食いしばれ。いいか」

と、私の父は当時の教師たちが生徒を殴るときにいつも言う言い方をした。そしてその朝鮮人の学生が命令されたとおりにすると、正確に肩の力を抜いて、よくききそうな一撃を加えた。すると、不思議なことは、殴られた学生が、ふたたび小さな声で、哀号！ と
呟いたのである。

「よし、そうか。そういうことか」

と、私の父は、かすかに笑いながらうなずいた。それから不意に唇を固く結んで、こんどはかなり力をこめた一撃を相手の頬にあたえた。朝鮮人の学生は、二、三歩たたらを踏んで姿勢を立てなおすと、またもや、哀号、と、泣き笑いのような妙な表情でいったのだ。

あの時の根くらべのような朝鮮人学生と私の父との一幕は、その後ながく私の記憶の暗部に黒くしみついて残った。その時、あくまで哀号、とつぶやき返した朝鮮人の学生が屈

伏したか、それとも個人的にはきわめて誠実な教師だった私の父親が根負けしたか、私は憶えてはいない。いずれにせよその時の、殴る側と殴られる側との、泣き笑いのような奇妙に屈折した表情が小学生だった私の中にトゲのように残ったのだった。

植民地における日本人について、これまでさまざまな言われかたがなされてきた。それは時には自己批判であり、時にはそのことへの弁明であつたりもした。

だが、私自身、幼い頃からある借りを背負って生きていた、という実感はある。日本人の教師が殴ったのは、朝鮮の子弟だけではない。まったく同じように私たちも鉄拳制裁（てっけんせいさい）というやつを受けたし、気合いを入れられることは日常のことだった。

にもかかわらず、日本人が日本人を殴ることと、日本人が異民族、ことに支配している土地の民族を殴ることとの間には、はっきりとことなつた部分がある。それは、私たちが配属将校に殴られるのは、個人として殴られるだけだが、朝鮮人が日本人に殴られるということは、ひとつの民族として傷つけられる部分があるということになるのだろう。私の父親は、かなり熱心な教育者であり、卒業生や在学中の生徒の父兄の間でもむしろ一種の好感をもってむかえられていたと思う。だが、そういった個人的事情と、対民族の状況とは、また別な視点で眺めなければならぬことなのだ。

私は過去の日本人の立場を、いわゆる原罪意識でもってふり返る気持はない。だが、そこを抜きにして私の物の考え方、感じ方は成立しないし、これからもそうではないかという気がする。哀号、という文字が活字の中から浮き上がって見えてきたのも、おそらくその証拠であるにちがいない。

私は一度、哀号、という叫び声を思わず発したことがある。それは、私が平壤の郊外を流れる普通江という河の水防工事から帰ってくる途中だった。

敗戦後、ソ連軍がはいってくると、間もなく目ぼしい家屋の接収が行なわれ、私たちはあちこちの建物にまとまって収容された。そして夏が過ぎ、冬が近づくころ、平壤の街は満州から南下してくる日本人難民の群れではちきれそうになっていた。私は父親にかわって、人民委員会から割当てられる労働供出の義務をはたすために、その水防工事に参加していたのである。

その日、私は知人から借りた自転車を押して歩いていた。場所はどの辺だったか、はっきりはおぼえていない。低い土塀と藁ぶきの家並みが曲がりくねって続いている坂の多い村落の一面だったような気がする。すでに冷え冷えとした空気には長い冬の予感がにじみ、地面を低く這うように流れて行くオンドルの煙がいがらっぽく喉を刺した。あのオンドル

の紫色の煙の縞しまの中を、自転車を押して行くと、その煙がまとわりつくように足もとで小さな渦を作るのだ。

私はひどく憂鬱ゆううつな沈んだ気分で、水たまりの多いぬかった坂道を登って行きつつあった。それは慢性的な空腹感でもあったし、また折角借りてきた自転車の前輪のタイヤが途中でパンクしてしまったためでもあった。私はその自転車の借り賃として、一日の労働の報酬としてもらう高梁こうりやんの半分を渡す約束をしていたのである。自転車の持主は、たぶんきびしくパンクの責任を追及するにちがいないと思われた。私はぼんやりとそのことを考え、またいつになったら内地へ引揚げられるのだろうか、などと考えながら、夕闇ゆうやみが重くあたりを包みはじめた集落の中を通過しようとしていた。

そのとき突然、自転車の前輪に鈍いショックがあった。ぼんやりしていた私が驚いて顔をあげると、白い服を着た中年の朝鮮人の婦人が、私をにらみつけるようにして立っている。どうやらうっかりして、向うからやってきたそのおばさんの白衣に、泥によごれた自転車の前輪をぶつけた様子である。街灯にすかしてみると、白い服の膝ひざのあたりに、黒々と泥のあとが見えた。

「哀号！」

と、その時、私は思わず小さく叫んだ。

思わず、と書いたが、それは一瞬の反応だったからそう書いたのである。その言葉が私の口について出る何秒間かの短い時間に、私の頭のなかで素早く働いた反射的ともいえる一瞬の心の働きは、もっと複雑なものだった。

私は、瞬間的に、哀号と叫んだ。そして後は何も言わずに、軽く頭をさげて通りすぎようとした。私は自分を日本人と相手にさとられたくはなかったのである。服装では判断がつかない。朝鮮人の少年と思われれば、それはちょっとしたミスですむだろう。だが、もし、こっちが日本人だとわかったら、どうなるか、ひどく恐ろしい気がしたのだった。

その地区は昔からの朝鮮人だけの集落で、敗戦前もあまり日本人たちが立入らなかつた貧しい地帯だった。通行中にどこからともなく石ころがとんできたり、窓から黙ってにらみつけられたりする場所なのだった。私はそれを知っていながら、遠回りをするのがいやさきにそこを通り抜けようとしていたのだ。

もしもその時、そのおばさんが私に文句をつけようと思えば、それは簡単だった。大声で私をののしり、日本人が自分にこんなことをした、と叫べばいい。集まってくる朝鮮人たちが、今や立場の逆転した私にどういう態度で出るか、私はその想像におびえたのである。そして私は、哀号、と、いかにも朝鮮人らしい発音で**つぶや**、頭をさげて素早く通り過ぎようとしたのだった。その時、相手のおばさんは、ちょっと眉まゆをひそめるようにして私

をみつめた。それから、肩をすくめ、首を振って舌打ちすると、仕方がない、といった表情で私の横を通り抜けて行った。

「へうまく行った」

私はがくがくする足もとを踏みしめながらその場を離れようとした。うまく朝鮮人に化けおおせたという気持が、私の心をくすぐった。私の背後で、おばさんが何か言う声がきこえたのは、その時だった。

「日本人ノクセニ」

と、その声はきこえた。はっきりした日本語だった。私は思わずふり返ってみた。白い服はゆらゆらとオンドルの煙に巻かれながら坂をくだって行こうとしていた。私はその時、自転車を投げ出して、わあっと大声をあげて坂道を駆け出したいような気がした。

「日本人ノクセニ」

と、吐きすてるように呟いたあのおばさんの声が、ときどきふっときこえる。

「日本人ノクセニ」

それを思い出すと、反射的に、哀号、という呟きが出てきてしまう。哀号、とは、私にとって、そんな響きを持った言葉である。ただ単に、哀しみや嘆きの表現ではなく、もっと複雑に入組んだやりきれない言葉なのだ。

哀号！

* 出典 『ゴキブリの歌』 角川書店・五木寛之自選文庫、一九七二年

五木寛之 いつき・ひろゆき

一九三二年、福岡県生まれ。中学一年のとき平壤で敗戦を迎える。引揚げ後、業界誌編集、ラジオ番組制作、CMソング作詞、放送台本執筆などで活躍。六六年、「さらばモスクワ愚連隊」で小説現代新人賞を受賞、以後、作家活動に入る。主な作品に「蒼ざめた馬を見よ」（直木賞）、「青春の門」（吉川英治文学賞）、「戒厳令の夜」「四季・奈津子」「風に吹かれて」など、訳書に「かもめのジョナサン」などがある。